# 「座談会」を終えて
# 自治意識を育てることの必要を痛感

三ッ井富士夫

職業柄高校生相手の毎日であるが、高校生座談会の司会は初めての体験である。生徒たちの思いを十分引き出し得たかは悔いの残るところであるが、各校の『校則』にかかわる現状への率直な考えの一端が出されていると思われる。

高校生にとって『校則』は、学校から押しつけられたものという意識が一般的なように読み取れる。そして、『校則』への批判、疑問の視点は、納得出来ない規則で縛りつけられていること、学校・教師の指導が建前的なものであることや不公平な指導であることにあるようである。そのことは、裏返してみると、もっと自由に伸び伸びとした学校生活がおくれるものにという強い思いがある。

学校によって『校則』の厳しさに差があるとはいえ、生徒を管理・統制するという傾向が強く感じられる。「あまり厳しくない」ことが放任につながり、「厳しさ」は管理主義的指導の強化につながっている。学校が管理主義的指導から脱し得ないでいる現状の反映であると思える。

別の面で注目されるのは、授業規律や校内美化等について、学校や教師に管理を期待する声である。これは、真剣になれる授業をと望む生徒だけでなく、授業規律を乱している生徒たちも、授業規律は教師がつくるものとしている。このことは、高校生の自治意識の弱さの反映でもあろうと思える。

また、『校則』は「先生と生徒で」という意識はあまり育っていないし、「先生が生徒の意見も聞いて」程度が一般的なのではないかと推測される。

座談会全体を通じて強く感じたのは（教師としての反省も含めて）、『校則』そのものの内容の見直しの重要性と共に、生徒の自治意識、民主主義的感覚を育てることの必要性である。高校生の自治意識は極めて弱い、育っていない、育てられる教育がされていないと言える。

一九六〇年代頃から強められた学校の枠内での「自治」、教師の指導管理の下での「自治」による指導の反映であろう。

校内暴力や非行等で荒れた学校での、生徒自身による克服への取組み、自治意識を高める指導で乗り越えた実践を教訓として、今後の『校則』見直しを進めなければならないのではなかろうか。

（みついふじお＝新潟江南高校）